公益社団法人 北海道勤労者医療協会 勤医協中央病院

たまねぎ通信

No.68
2026.6

産婦人科

2026年4月 診療開始



安全・安心な出産・子育てを支援しています

勤医協中央病院

産婦人科

6東病棟　産婦人科外来　助産師外来

2026年4月 診療開始

2026年4月、勤医協中央病院で産婦人科が診療を開始しました。勤医協札幌病院からの移転に伴い異動してきたスタッフと共に、「安全な出産とスムーズな子育てを多職種でサポートするチーム医療」に取り組んでいます。また、妊婦や婦人科疾患の患者さんが適切な診療を受けることができるよう、内科や外科と協力し全身状態を踏まえた総合的な医療を提供します。





入院室



新生児室

誰もが安心して出産・子育てができる社会をめざす取り組み

安心して子育てを始めるために

公的制度やサービスを提供する関係機関と連携し、一人一人の状況に応じた産後支援を行います。

24時間365日の受け入れ体制

分娩はもちろん、24時間体制で緊急時も対応できます。母子の安全を最優先に全力で出産を支えます。

日帰り型「産後ケア」（予約制／有料）

赤ちゃんをナースステーションで預かり、お母さんは「産後ケア室」でゆっくり休息できます。

【対象】産後6カ月未満の母子　**【時間】**11:00～16：00

【内容】●赤ちゃんの沐浴とベビーマッサージ ●助産師による育児相談 ●産後ケア食（昼食）の提供 ●小児科医師による診察（希望者）

全室がゆとりある個室

入院室は差額ベッド代不要の全室個室です。ご家族と過ごせる広さがあり、洗面台も完備しています。

和痛・無痛分娩も提供

出産時の体力的負担を軽減し、産後の回復や育児への移行を支援するため、和痛・無痛分娩を行っています。

経済的な不安にも対応

札幌市内で「入院助産制度※」を利用できる医療機関の一つとして、出産費用に関する相談を受け付けています。

※入院助産制度は、経済的な理由で出産費用の支払いが難しい妊産婦さんを対象に、入院・出産費用の一部または全額が公費で助成される制度です。

女性の健康を多職種でサポートします

勤医協中央病院 副院長
産婦人科科長
にしおか　としやす
西岡 利泰



日本産科婦人科学会専門医
母体保護法指定医
日本内科学会認定医
日本女性医学学会女性ヘルスケア専門医
新生児蘇生法「専門」コース認定者

多職種連携のチームプレーが強み

勤医協中央病院の医療体制に、勤医協札幌病院で56年間の実績を重ねてきた産婦人科が加わりました。正常分娩はもちろんのこと、複雑な背景を持つ妊婦も積極的に受け入れ幅広いサポートを行います。

妊産婦の社会的背景や家庭環境を理解しながら関係性を築くことを軸に、医師・助産師・看護師・ソーシャルワーカーなどがチームを組み、電子カルテや病棟で毎週行われるカンファレンスで情報を共有しながら不足のない支援につなげています。

診療科を越えて専門医が連携

産婦人科医は、母体の医学的評価や子宮・胎盤の状態を診察し、妊娠合併症の管理や胎児の健康状態を確認します。

出産直後の新生児の診察には小児科医が関わり、健康状態に応じて専門的な医療を提供します。緊急時には院内で迅速な初期対応を行い、専門的な治療が必要な場合には、適切な専門医療機関へ引き継ぐ体制を整えています。

出産前からメンタルケアを重視

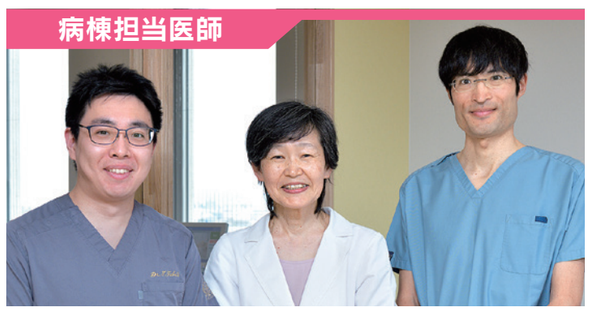
産前産後はホルモンバランスの変化により心身が不安定になりやすいため、メンタルケアも重視しています。特に精神疾患を抱える妊婦には、出産前から専門の医療機関と連携し、安全に服薬や治療を継続できるよう支援しています。外来での妊婦健診時から対応し、心身の安定や必要な環境を整え、安心して育児をスタートできるよう支えます。

幅広い婦人科疾患の診断・治療も

女性の健康を生涯にわたって支えるため、月経困難症、更年期障害、骨盤臓器脱（子宮脱）、婦人科腫瘍など、幅広い疾患の診断と治療を一貫して提供します。特に手術においては、腹腔鏡手術をはじめとした低侵襲手術に取り組み、早期の社会復帰をサポートしています。

また、婦人科疾患には腸管や泌尿器の合併症を伴うことがあるため、当院では他科との緊密な連携のもと、合併症や重症例にも対応できる診療体制も備えており、安心して必要な治療を受けることができます。

病棟担当医師



田畑 智章医員　　長島 香産婦人科副科長　　西岡 利泰副院長



週1回のカンファレンスで、入院前の妊婦さんや患者さんの情報や病状経過を医師・看護師・助産師で共有し、治療方針を確認します

勤医協中央病院 産科セミオープンシステム
地域のクリニックと連携しながら出産を支えます

問い合わせ先：勤医協中央病院 連携課
☎011-782-9111（代表）

地域のクリニックで「妊婦健診」を受け、当院で「分娩」を行う「産科セミオープンシステム」を実施しています。24時間365日の救急体制と小児科医師による24時間対応を整え、地域のクリニックの診療時間外の急な受診にも対応しています。安心して妊娠・出産期を過ごしていただくために、ぜひご利用ください。

スタッフの密な情報共有と円滑な連携により

安全・安心な出産・子育てを支援しています

妊娠

出産

妊娠期

妊娠期から寄り添い、安心して出産を迎えられるよう支援します

助産師外来



外来助産師 主任
中村（なかむら） みどり

助産師外来では助産師が妊婦健診を担当し、妊産婦の不安や悩みも含めて幅広い情報を把握し、カンファレンスで病棟と情報共有しながら関わりを重ねます。

妊産婦の社会的背景や家庭環境にも目を向け、必要な支援制度やサービスを案内しています。公的支援の利用に不安やためらいがある方には継続的な関わりを通じて信頼関係を築き、一人一人に合った支援につなげます。

支援につながるまで時間を要することもありますが、心身の状態や生活環境を整え、安心して出産を迎えられるよう寄り添います。また、孤独な子育てにならないよう、保健センターや訪問看護ステーション、ヘルパー事業所などの各関係機関と連携し、妊娠期から産後ケアまでの切れ目のない支援を行っています。



安全に出産できる環境を整え母子の命を守ります

6東病棟



病棟助産師 主任
嵯峨（さがちひろ） 千紘

分娩は、赤ちゃんとお母さんの命がけの営みです。助産師は妊産婦の状態を細やかに観察し、分娩経過の記録や介助を行いながら、母子の安全を支えています。異常の兆候があれば医師や関係職種と連携して迅速に対応します。「母子の命を守ること」は、助産師にとって最も大切な使命です。

定期健診を受けられない場合の出産リスクは、さまざまなデータから明らかになっています。どのような背景があっても、安全な出産とその後の生活を支えるのが助産師の役割です。当院では、妊娠期から病棟助産師が外来で継続的に関わり、一人一人の不安や悩み、さまざまな選択に寄り添いながらサポートしています。

また、地域の周産期医療を支える人材育成にも力を入れています。ハイリスク出産に対応する知識や技術を地域の医療従事者や学生に伝える講義を行うほか、助産学生の実習も受け入れています。



分娩室「いちょう」



分娩室「さくら」

病棟体制

妊婦さんや患者さんの情報を共有しチームで支えます



6東病棟 看護師長
後藤（ごとう） まり子

6東病棟（産婦人科と内科の混合病棟）のスタッフは助産師と看護師を合わせて約20人。割合は半々で、お互いの専門性を学び合いスキルを高めることで、妊産婦や新生児、内科の患者さんに適切なケアを提供できる体制を整えています。分娩経過記録や分娩介助、出産直後のアセスメント、新生児処置、内科の患者さんのケアなどを連携・協力しながら行っています。

新体制の開始にあたり、情報共有を徹底するため、申し送りや業務開始前の打ち合わせを丁寧に実施しています。日々変化する状況をチームで把握し、分娩の進行や患者さんの状態に応じて柔軟に役割を調整しながら、迅速で安全なケアにつなげています。また、緊急時には院内で直ちに対応し、より専門的な治療が必要な場合には、専門医療機関につなぎ、適切な医療が受けられるようサポートしています。

助産師外来で得られた妊娠期の情報は、電子カルテや週1回のカンファレンスで共有し、妊産婦一人一人の状況に応じた病棟での受け入れ準備を進めています。





勤医協浦河診療所から勤医協中央病院へ

命をつないだ治療のリレー

心臓移植を受けて回復した患者さんと8年ぶりの再会



2017年、重篤な心筋症と診断され、補助人工心臓を装着し移植待機へと進んだ辰巳遥さん。その後、待機6年目の2023年夏、ついに心臓移植を受けることができました。「元気になった姿を見せたい」と2025年12月に北海道を再訪し、当時の主治医・担当看護師・リハビリテーションセラピストと8年ぶりの再会が実現しました。



辰巳 遥さん

拡張型心筋症を発症し、2017年8月に勤医協中央病院に入院し診断を受ける

【拡張型心筋症】心筋（心臓の筋肉）の収縮力が低下し、心臓が拡大して全身に十分な血液を送り出せなくなる病気

鈴木 隆司 名誉院長

【専門分野】循環器内科
【資格など】日本内科学会認定内科医、日本循環器学会認定循環器専門医、心血管カテーテル治療名誉専門医、心臓リハビリテーション指導士

突然の救急搬送と心筋症の診断

鈴木名誉院長　8年ぶりの再会ですね。ずっと気にしていました。再会できて本当にうれしいです。

辰巳さん　2023年夏に心臓移植を受け、元気に動けるようになったので、最初に治療をしてくださった皆さんに会いたくなり連絡しました。お時間を作ってくださり、ありがとうございます。

鈴木　2017年8月24日、勤医協浦河診療所の渋谷譲所長から「心筋症か心筋炎の疑いの患者さんがいる。救急搬送するから診てほしい」と電話がありました。約2時間後に当院のERに救急搬入されてきた辰巳さんの様子は、今でもはっきりと覚えています。

辰巳　到着時、ERの前にスタッフの皆さんが並んでいたので驚きました。「私、呼吸が苦しいだけなのに、なんて大げさなんでしょう」と思ったほどです。

鈴木　顔面が蒼白だったので、これは尋常ではないと感じました。呼吸苦を改善させる薬物治療を行いながら、重い心筋症か感染が原因の心筋炎かを急いで判断する必要がありました。そして、病理検査を行い「拡張型心筋症」という診断に至りました。ご自身の心臓では命を保てないこと、補助人工心臓を装着しなければならないこと、その先に心臓移植が必要になることをお伝えしましたね。

看護師さんに支えられ「生きるための治療」を選ぶ

辰巳　父も同じ病気で亡くなっていましたが、私は入院直前まで浦河町の地域おこし協力隊として元気に活動していたので、なかなか受け入れられませんでした。「何かの間違いでは？」「補助人工心臓や心臓移植以外の治療法はないの？」と気持ちが追い付かずに混乱しました。

鈴木　辰巳さんは看護師なので、医師として「心臓の状態を示す数字」や「強心剤の投与量」などをその都度、正確に伝えました。ご自身の体の状態を客観的に判断できるのではないかと考えてのことです。

辰巳　はい。強心剤の点滴を外したら、命に関わる状態だと理解できました。でも、病室にはいたくなくてデイルームで担当看護師さんに「私はどうしたらいいの」と同じ問いを繰り返していました。看護師さんは私の気持ちに耳を傾け、混乱する心に寄り添ってくれました。私は自分の気持ちを言葉にして伝えることで、自分自身を少しずつ納得させていたのだと思います。そして「生きるために治療したい」と決めました。



大阪での6年に及ぶ待機生活

鈴木　3週間後に病状管理のために北海道大学病院に転院し、その後、出身地の大阪で治療を受けるため、再度転院されましたね。

辰巳　診断から4カ月後の12月に大阪大学医学部附属病院で心臓移植の登録が決定され、移植までの橋渡し治療として植込型の補助人工心臓を装着する手術を受けました。ドナー心臓が圧倒的に不足しているため、待機期間は5年以上と言われていました。待機中に亡くなる患者さんも少なくないことを知っていましたから、「体力と気力は落とさないように」とパン作りや登山などの趣味を体調に合わせて楽しみながらも不安は常にありました。

鈴木　私も渋谷所長も、辰巳さんのことがずっと気がかりでした。ですから、待機6年目の2023年夏に大阪で心臓移植を受けられたと知ったときは喜びました。同時に、移植後の生活はどうなのか、元気に過ごせているかと心配もしていました。

心臓移植後の回復と「北海道での再会」

辰巳　術後はしばらくつらい症状が続きました。でも、新しい心臓に少しずつ適応できるようになると、いつもの自分を徐々に取り戻しました。いただいた命を大切にして、どう生きるか、今後の人生を考え出したとき、「そうだ、北海道へ行こう。浦河と札幌でお世話になった方に会ってお礼を言おう」と。主治医の鈴木先生、担当看護師の松田さん、心臓リハビリテーションを担当してくれた石島セラピストさんに再会し、胸がいっぱいになりました。



鈴木　私たちも、辰巳さんの元気なお姿を見て、とても励まされました。「患者さんの力になれた」という喜びを実感しました。

辰巳　私の次の目標は、自分の経験を生かして、病気でつらい思いを抱えている人に寄り添うことです。私にできることは何かを考えている最中です。私を支えてくださった皆さんに少しでも恩返しができればと思っています。

鈴木　これからのご活躍を、北の大地から応援しています。

日本における心臓移植

心臓移植待機患者は、2025年10月時点で795人。ほとんどが補助人工心臓を装着した状態で待機し、その期間は約5、6年と長期化の傾向は続くと予想されています。

日本臓器移植ネットワーク（JOT）では、心臓移植という治療が広く知られ、救命される患者さんが増えるよう、臓器移植の普及と発展に向けて進んでいます。

たまねぎ通信68号　発行／公益社団法人 北海道勤労者医療協会 勤医協中央病院　発行責任者／事務長 澁谷 幸伸　制作／有限会社 慶文社

たまねぎとぴっくす

地域の子たちの健康を支えるために

勤医協伏古10条クリニックで小児科診療を再開

勤医協伏古10条クリニックで約10年ぶりに小児科診療を再開しました。北海道勤医協内の機能再編によるもので、勤医協札幌病院から小児科機能が移転されました。診療は引き続き、川真田、小林、福山の3医師が担当します。

一般診療に加え各種ワクチン接種にも対応。迅速な診断のために血液検査やエコー検査も実施しています。

勤医協の小児科は、病気を治すだけでなく、ご家族の不安に寄り添いながら、地域全体で子どもたちの成長を支えるネットワークづくりをめざします。地域の医療機関と緊密に連携しながら、子どもたちの健康を支える地域の医療拠点としての役割を果たしていきます。

スマートフォンから診察予約できます（当日予約のみ）

小児科外来（予約制）					
診療時間	月	火	水	木	金
9:00～11:30	○	○	○	○	○
13:30～14:00【ワクチン】	○	—	—	○	○
14:30～16:30	○	定期予約	—	○	○

※土日祝は休診







公益社団法人 北海道勤労者医療協会

勤医協中央病院

Kin-ikyo Chuo Hospital

〒007－8505 札幌市東区東苗穂５条１丁目９－１
℡011－782－9111（代表）　FAX 011－781－0680

●外来診療はすべて予約制です　●救急は24時間受け付けています

【休診日】第４土曜、日曜、祝日、年末年始（12月30日～１月３日）

診療科目

内科　呼吸器内科　循環器内科　消化器内科　糖尿病内分泌内科
腎臓内科（人工透析）　リウマチ科　血液内科　脳神経内科　緩和ケア内科　外科
呼吸器外科　心臓血管外科　消化器外科　肛門外科　肝臓外科　膵臓外科　乳腺外科
脳神経外科　整形外科　泌尿器科　産婦人科　小児科　眼科　精神科　麻酔科
リハビリテーション科　放射線診断科　放射線治療科　病理診断科　救急科

勤医協中央病院 周辺地図



診療日（除土曜）には無料巡回バスを運行しています

詳しくは勤医協中央病院ホームページで

きんいきょう　検索

関連施設

勤医協伏古10条クリニック

〒007－0870 札幌市東区伏古10条３丁目２－８
℡011－786－5588　FAX 011－782－3428

理念 －医療・福祉宣言－

私たち勤医協中央病院は、地域の人々に支えられ、この地域になくてはならない病院として発展していくことをめざし、ここに「勤医協中央病院　医療･福祉宣言」を発表し、「勤医協綱領」に基づき、その実現に努めます。

1. 安全・安心で納得のいく医療・福祉をすすめます。
2. 地域・友の会とともに健康で住みやすいまちづくりをめざします。
3. 互いに学び成長する職場・病院づくりに努力します。

基本方針

1. 札幌市北東部の地域中核病院として、急性期医療とがん診療、そして専門的医療を柱に、患者さんの要求に応える医療・福祉の連携を推進する医療機関として発展していきます。
2. 北海道の地域崩壊・医療崩壊を防止する運動・支援する運動の一翼を担う病院として行動していきます。
3. 災害時・緊急時には病院をあげて地域と住民を守る医療機関となれるように整備を進めていきます。
4. 患者さんとの信頼関係を大切にし、良質で安全な医療を、「共同の営み」として提供する、より高い技術も兼ね備えた病院をめざします。
5. 臨床研修病院として、民主的な集団医療の実践を通じて、人間の尊厳および権利を尊重できる医療人を育成します。
6. 地域住民や地域の医療・福祉施設とも協力し、子供から高齢者まで安心して住みつづけられるまちづくり、憲法と平和が守られる国づくり、医療・介護改善の運動をすすめます。
7. 民医連･勤医協綱領に基づき、無差別平等の医療実践をめざします。

私たちは、これからも無差別・平等の医療をめざし、無料・低額診療制度を継続します

医療連携・患者支援センター

連携医療機関専用連絡先
℡ 011－787－7037
FAX 011－784－2735

地域に開かれた病院の窓口として以下の業務を行っています

- ●地域の開業医の先生方からの紹介や逆紹介
- ●患者相談窓口
- ●入退院支援と転院に伴う調整
- ●医療福祉相談
- ●患者さん、ご家族への療養支援・がん相談支援

勤医協中央病院 問い合わせ　℡011－782－9111（代表）　FAX 011－781－0680